弓式辨　上

弓式辨叙

史記曰咨於固實徐廣曰固一作故韋昭曰故實故事之是者予嘗考社金革死而不厭士之志也居恒而不恣亂武也累世以芳禄仕君有暇曰則學於文

武矣故實稽古事而在悟時變於今非節之不足故實以是温故而知新之儒語的切哉然蚤晏不可懈稽古者而已矣亦稽古尚書曰若稽古後漢書桓榮曰今日所蒙稽古之力也維當

今實者所以在稽古也文選憲章稽古注憲法也言法其舊事考其故事焉此謂合故實傚者可能察者也干茲所爲一勇軒之著述有武器普録其弓書者逸見家之傳也號弓式父一貫

爲評註之題而云弓式辨矣

文化五著雍執徐年辜月上旬

不磷子一德識之

弓式辨序

温故而知新の聖語は學者須臾も忘るべからずるの義故實の活然たる所爰に必せる而已されば故實に預ぬべし人は吾國の古書三部六正史格式律令のはじめとして諸記録野史雜書小至るまで渉猟して其人情時変に通達し分明實正なる所を考て今當に應用有べき事也然に世に無稽の妄説の演る輩數多ありて幼學を誑かす類少しならず或は一家一流の傳授に凝附

し或は巫覡浮屠氏の説を雑入し或は画工の習などを
宗として武士の意地實事の故實には雲泥
なる物多し臆に此弓式なるものは遠藤保武が
述なる武器普録に添附したる弓箭の書にて
彼奥書に逸見家の名目出たり則五冊ありて文面
疑はしき事なきにあらすといへおも此弓式なるものは
全く彼家の文例なるべしと思るゝ所多しと小笠
原の書風に似たり元來逸見と小笠原は同苗なれば
なり故に小笠原家の古書類を取拾いて此條目に

引合せ愚評を加へたるに同家流の書なれども如此其説
異同區々なる所もあり彼小笠原家の故實なるものは名家
流當世に普くひろごり雑一指をさす者もなく
公論とも云べけん歟乍去専温古知新を以て主意
と勢し故實にはあらさるへし彼家流の書數をも粗覧
におよび又予が祖父大野正尭なる者水嶋傳の小笠原
流を學て冊札疊重して今に存りたり彼是配
服せるに予が管見にては古記録にも不軍史雑書類にも
拘はらす世変時勢にも不取合悉く彼一家流限

の事と見へたり伊勢安齋先生云足利将軍の時小
笠原家は弓馬の藝を司らしめ外面の禮を宗と
す伊勢家は殿中の礼儀武事をも主らしめ給所の
家柄なりと聞へたり如此両家は足利将軍家に専ら
用ひ給ふ事なれば天下普く此家流を尊信し
不用といふ事なし故に彼末流の輩に至りては或後作
私製の事を附會して諸人に用ひらるゝ事を専として
是に諂ひ鎖細なる俗禮迮も拵へたる者を少しならず
と聞ゆ是も其筈なりや小笠原長秀當家弓法集に艶書

の認様をも記れたり弓馬諸禮の儀を録せし書
中に好色の文法を載たる如何の事にや哂べき甚
しきもの歟是等の趣にても此類流の事推察すべし
能愚俗の情に叶ひて普く世に行れし者なり都て上
を習ふの下にて貴人の所爲なるものは其餘風後世に
至までも傳るなり既に足利家の寵愛なる家流今に
不朽或東山義政将軍珎(珍)器を好み茶を翫び秀吉太閤
の茶會をなし利休など云者行れ秀次関白遠矢堂
射を好給ふが如く悉く今世に其餘風流行して天

下に繁茂せり又後世に変革の志しある賢君出給ひ
ても其深慮なりて其儘直垂しにやいよく流行せる
事にぞ往昔も厩戸皇子を初として天武帝聖武
帝の如き佛法尊敬の君出給ひて今に其道廢せる
事なく繁昌せるにて考べしされば何の道何の藝
とても所詮上に用ひらるゝ事ならでは其全盛をは得
べからず故に世を貪る名聞の族邪智をめぐらして
徒に諂ふは愚俗の了簡勿論なり昔とても今とても
人情は不異學で智格の明麗なるるものと無學

にして其心の昏昧なるものとの差別なりたゞ是を
切磋して勧善懲悪せるものは學問稽古
藝術修行に止る而已但し此止るべき所を取
失ひて漢學を好者は是に泥み和學を好者は又
是に凝附古昔を好者は何事も昔しならで用
ひ雑しとて或は小笠原の騎射歩射を今世興
行せる人も弓器馬具射手装束類に至まで其
傳書に毛頭不遠事を恐守して今當の時勢に
は不都合なる道具類を製し甚煩しき事とも

あり假令其道具其作法等は能調ひたりとも今
時にて全備せざる事あり先今の月代頭小鳥
帽子を被りし躰渉ましきにあらすや古今雑
班なり能く考べし昔はむかしの時風ありて必
むかしの事たりとも今は不應して用ひざる
事あり又古人の行ひたり共正邪虚實の品ありて
取捨なくて不叶所あり既に源義家源頼政のご
とき精射の名譽なる人も堀河院の病脛に鳴
弦を行ひ近衛院の怪物に射事せられし趣平

家物語源平盛衰記等に見へたる類は正義に
あらざるにて可考たゞ其時勢は移り変るもの
にて高貴の賢愚にて世風に善悪ある事なり
上に有徳の君出給ひて其道ひらけたる豪傑をあ
げ用る時は普く世に行れぬるなり既に武器故實
の一端を云に正徳の頃新井白石先生の愚得随筆
なるを本朝軍器考と題にて官准板に行れし
より世上にひろく本據を正し稽古の故實
出たるにや凡人情の常にして無学淺智なる人

は貴も賤きも或は空理怪異の學を好ものにて
真實正義の道は行れ難きなり故に奇談無稽
の論而已ひろごり無學文盲の小人の了簡と符
合して時を得る事なりされば賢君上に坐して其
正道藝術堪能の人傑を擧用ひらるゝ時は其正
道の學流普く行れ武士の風俗も忠實にして
拙からず其餘風も永く移り敗弊せる事難し
彼小笠原家流今の世に用ひらるゝが如し考べ
し但其正義の藝道に至し古今に融通し取捨

の節中を爲さんものは温古而知新の語を
須臾も忘るゝ事なくして古正史及野史雜
書等を恒に熟覧して其本據を正し古
器物をも勘辨し知らざるを不知とし今
當の用に應し眞實の其揉を立貫ぬる
時は自然を其義叶べし是武士の意地には
異変なし神武とやらんのむかしも今も一
縄の貫たるが如し徒に世の定らず移り
行ものは譬は天地陰陽の如しと云べし武士

意地の古今一機なるは喩ば一元気の如しと
云べし此所能々發明すべし全く誠實の
一つに止る而已

文化五戊辰年八月廿五日　　大野又兵衛一貫

弓式辨引用書目

小笠原系圖畧

日本書紀

古事記

倭名類聚鈔

夫木抄

射御持長記

高忠聞書別記

美人草

竹馬記
高忠聞書
弓馬故實
岡本記
徒然草
射御拾遺抄
弓法私書
諸書當用抄
犬追物方聞書

用害記
小笠原大双紙
弓馬聞書
八廻日記口傳
的出張記
扇鏡
異本保元物語
異本平治物語
源平盛衰記

一谷合戦画
射手方聞書
法量物異本
弓法秘傳聞書
伴大納言流罪画
後三年合戦画
酒呑童子繪詞
包記
三儀一統

射手掻副記
参考太平記
平家物語
義經記
禁秘抄
清少納言枕草子
春曙抄
源氏物語
大口子積藏書

武田信豊記

右通計四十五部は其舊新を撰に不及
引用せる所の先後に順て書録す者也

弓式辨　目録

巻之上

一　式之事
二　天梔弓之事
三　以神頭稱射物事
四　弓返古詞之事
五　依弓可巻藤品之事
六　馬上納弓之事
七　馬上可持弓事

八　騎馬傍可令持弓太刀事
九　弓構時有貴命事
十　入袋弓可令持下部事
十一　弛弓以紙捻可結弦事
十二　我(我)爲持馴弓可出人事
十三　於君前可張弓事
十四　於人前可張弓事
十五　張弓所可尋問事

巻之下

一　可張直弓事
二　弓羽矢間之事
三　弦嚙濕事
四　弓幾人張事
五　弦衣之事
六　可知他弓力事
七　弦打之事
八　對人不向彈事
九　見弓事

十　軍陣弦打之事
十一　立弓方之事
十二　立弛弓方之事
十三　立入袋弓方事
十四　鏑矢可納神前事
十五　弓太刀一度渡事
十六　持出弓事
十七　可渡弓之事
十八　可請取弓事

十九　遣弥弓事
二十　可渡張弓添矢事
二十一　可渡弓箙之事
二十二　可請取弓箙之事
二十三　渡矢事
二十四　見矢事
二十五　弓順逆之事

以上四十个條

右目録ハ本文ニハ無之ト雖便覧ノ爲ニ補之爰ニ記ス者ナリ[*1]

*1. 現代人に是をやると挫折すると思われるので赤字で補注を入れた。22/11/10.

弓式辨　巻之上

大野又兵衛一貫述

一式ノ事

弓式

○一貫曰此弓式ノ式ノ字ハ格。式。律。令。ト相立ヌル朝庭ノ作法ニシテ今ハ将軍家ニモ節制アル所也去(去)レハ私モ定制シテ或何(ハノ)式或(ハ)本式畧式抔ト云ケル事ハ不可有(レルレ)ノ義ナリ但(シ)小笠原家。伊勢家。抔ハ足利将軍ノ代ニハ弓馬諸禮内外ノ作法ヲ勉ラレタル家柄ニテ分別タリ此義伊勢安齋先

生著述ナル書ニハ所々ニ出タリ此家柄ヨリ定ラレタル事ナランニハ何ノ式ト云事ヲ記レタリ氏難スベキニモ非ズ此弓式ハ弓矢之巻ト題セル五本ノ首冊ニアリ逸見氏代々相傳ノ書ナル趣奥書ニ見タレバ各家ノ記也右逸見家ト云ハ武田小笠原ト同流ニシテ八幡太郎義家ノ第。新羅三郎義光ノ後裔(えい)ニテ甲斐源氏也則小笠原系圖畧ヲ見ルニ新羅三郎義光ヨリ

武田冠者義清ナリ義清ヨリ逸見冠者黒源太清光ナリ此清光ハ即逸見ノ大祖ナリ此家系ヨリ記録ノ書ナランニハ弓式ナドヽ書タリ氏強テ難ズベキニモアラザルヤ徒(タヾ)ニ私家ヨリ制作シタル式作法トカ云事ヲ普何者カハ用ヘキニヤ能々可考近世軍法者流故實者ナト著述ナル私書ニ式作法ナド云事ヲ書ケル者甚多シ腹皮ナル事ニアラズヤ

一 天ノ梔弓ト云ハ上古黄色ノ木ニテ弓ヲ作レルヲクチナシノ木ニテ造レリト云傳ヘタリ是ハ誤リナルヘシ後世其ノ黄色ヲ假リ用イテ梔ノ木也ト云ヘルモノ欤

○一貫曰天梔弓(ハジユミ)ノ天ハ神書ト云モノヽ例ニテタヾ尊称ナリト知(ル)ベシ日本書紀神代之巻ニ見(ユ)

日本書紀ハ人皇四十四代元正天皇ノ御宇養老元年十一月廿八日舎人親王ト太朝臣安麿(アヅタマロ)ト ニ詔シテ撰(バ)シム同四年五月廿一日切成テ奏上ス既ニ三十巻也

安齋先生伊勢貞丈先生云古事記ニ天ノ波士(アマノバシ)弓(ユミ)

見タリ日本紀ニハ天梔弓トアリ櫨モ梔モハジトヨム故櫨ノ字ノ代リニ梔ノ字ヲ假リテアテ字ニ用タル也神代ノ事ヲ書タル書ニハ字義ニ拘ラスシテ其詞アヘバ文字ノ音訓ヲ假テアテ字ニ書タル例多シ梔ノ字ニ拘リ泥ム事ナカレ梔ノ木ハ弓ニ作ルベキ木ニハアラス櫨ハ弓材ニ宜キ木也櫨ハ和名抄ニ（染色具ノ章ニアリ）文選注云櫨（落胡反和名波迩之）今黄櫨木色ト見タリ

波迩之（ハニジ）ト云ヲ中畧シテハジトモ云也古歌ニハ皆ハジトヨメリ俗ニハヽゼノ木ト云。ハゼハ。ハジノ轉語也今世ノ弓ノ側木ニ用ル。ハゼト云木即是也櫨ノ木ウルシノ木ニ能（ク）似タリ晩秋ニナリテ紅葉スルナリ古歌ニヨメリウルシノ木ハ紅葉セズ是其タガヒ也夫木抄（百首順徳院）一目見シ。トヲチノ村ノ。ハシモミヂ。又モミグレテ。秋風ゾフク。同（文應二年毎日一首ノ中）民部卿爲家ア

リマ山。シグルヽ峯ノ。トキハ木ニヒトリ
秋シルハジモミヂカナ。又櫨ニ二種アリ
同シ木ナリ一種ハ山ハゼト云身木ノビ
ラカニテ曲リク子ラズ枝シゲカラズ一
種ハ身木ノビラカナラズ曲リク子リテ
身木節多ク枝モ茂シ弓ニ削ルニハ山ハ
ゼヲ用ルナリ山ハゼ一名。シラハゼトモ
云ト記セリ
○一貫臆ニ此木弓材ニ可ナレバコソ其製

ハ古今異リトイヘ氏上古ヨリ今ニ至テ
用來(ヒレル)ニテ其良材ナル事ヲ知ベシ此山櫨
身木曲直ニテ強弱ノ得失アルヘシ其程
合ヲ可考勿論此所ハ弓工ノ専(ラ)司ル所ナ
レ氏買職ノ心根ハヒトヱニ金銀ニ拘ル
モノナレバ武士射術ヲ試タルウヘニテ
其注文ヲ以テ弓造セシメン時ハ此得失
ヲモ僉(みな)スベキ者也弓ハ其材ニテ強弱鈍
利出來スベシ可考又梔子ニテ物ヲ染タ

ル色モ黄櫨ニテ染タル色モ同シ黄色梔字ヲハジト云ハ本訓ニアラズ和名抄ニハ梔子和名久知奈之トアリ黄櫨ハ和名波迩之(ハニシ)黄櫨染ハ装束抄ニモ見ヘタリ袍ナドヲ染ルナリ右古事記ハ人皇四十三代元明天皇ノ御宇和銅四年太安麿上所也今ヲ去(ル)事凡(ソ)千九十五年計ニナル和名類聚鈔ハ人皇六十二代村上天皇ノ代源順(ノシタカウ)作也天暦元年ヨリ凡(ソ)八百五十年計ニナル夫木抄ハ人皇八十七代伏見院御宇藤原朝臣長清作(ル)之(レ)正應元年ヨリ凡(ソ)五百九年計ニナル

三 以神頭稱射物事

一 揔而弓ハ射テト雖神頭ヲ射テトハ云ベ

カラズ神頭ニテ何ヲ射テ的ヲ射テ草鹿丸物ヲ射テト云ヘキ也

○射御云矢頭ヲ射ルト云事アリ謂(イワレ)ナキ事也的ヲ射テト云丸物射テト云(ヒ)草鹿挾物ヲ矢頭ニテ射テト云義ナリ是本(ソ)也射御ハ應永二十九年三月小笠原備前守持長記也今ニ至テ凡(ソ)三百八十八年ニナル

○高忠聞書別記云神頭ヲ射ルト云事不(レ)謂ノ事也挾物トモ圓物トモ草鹿ヲ仕タリ

氏イヘバ神頭射ル意得(コヽロ)ベシ野ナドノ事

ナラバ目アテノ物射タルナンド云ベシ
先ハ犬ヲ射タルト申セバ犬ヲ射笠懸ト
イヱバ笠ヲカケテ昔ハ射タル也的ヲ射
タルト申セバ的箭ニテ射タルト知ル同
事也高忠聞書別記ハ寛正五年十一月日
多賀豊後守高忠記也今ニ至テ凡ソ三
百四十六年
計ニナル

○美人草云神頭ヲ射ルト云人アリ云フ間敷
事也弓ヲ射テトハイヘ氏神頭ヲ射テト
ハ云事ナシ的ヲ射テトハ云ナリ神頭ヲ

射テト云事アルマジキ也（此書ハ寛正五年十一月多賀高忠記ナリ美人草トハ此本ノ異名ナリ年暦隔數前ニ同シ）

○竹馬記云神頭ヲ射テ四目ヲ射テ抔トハ不云神頭ニテ何ヲ射テ四目ニテ何ヲ仕テナドヽハ云ベシ又産所ノ引目ヲ射テ夜引目ヲ射テ抔トハ云ナリ其品々ニ依テ云ナラハ又詞也个様ノ事不可勝計（永正八年十一月土岐伊豆守利綱記也今ヲ去事凡ソ二百九十九年計ニナル也）

一貫曰右ニ見タル如其射物ニヨリテ何

箭ヲ以テ何ヲ射テト云事イカニモ實正ノ事ナリ近頃ハ畧事而已多シテ事ヲナラベテ云事ヲ煩シク思テ甚キハ空言ニ同キヲ云ナリ畧事ハ其物ニ因テハ有間敷ニモアラズ武事ニ可預程ノ事ハ明白實正ニ云ベキ者也是等ノ類ハ古風ヲアヤマルベカラズ

四　弓返古詞之事

一　常ニ弓返シト云事ハ有ルベカラズ弓ヲ射返シテト云ベキ也

○射御云弓ヲ射返シテト云事本説也弓返シテト云事悪シ云間敷ナリ

○高忠聞書云常ニ人物語ニ弓ガヱシト云事イワレヌイヒ事也弓ヲ射カヘシテト云ヘシ

○弓馬故實云常ニ人ノ弓返シト云努々云間敷事也弓ヲ射返スト云ベシ（此書ハ伊勢貞順記）

天文永録ノ頃ナリ今ニ至テ天文元年ヨリ二百七十八年計ニナル

○竹馬記ニ云弓返ト云詞ハワロシ弓ヲ射返

シテ抔ト云ベシ

○一貫曰右書類ニ見ヘシ所ハ小笠原家ノ舊説ナリ前ニモ述ル如ク本文ハ逸見家ノ書ナレバ同流ノ説ナル事尤ナリ案ニ彼家流ニハ蒐ル忌厭ノ事間々少シナラズ弓返ナドヽ云時ハ弓ノ獨返(リ)タルニアタル弓ヲ射返ストイヱハ其事(クサ)ヲナシテノ唱ナレバ自然ニ弓ノ返ルト云事ヲ忌嫌テ云(フ)詞ナロト可知今世ハ此程ヲ取テ弓

廻リトモ云リ但シ是等ノ唱ハ何トナリ氏時宣ニ任スベシ又射御ニ弓射返スマジキ物ノ事ト云条船中ノ弓トアリ又岡本記ニ此書ハ岡本美濃守縁侍記也天文十三年十二月三日奥書アリ今ニ至テ凡ソ二百六十年計ニナルナリ船軍ノ時ハ両方氏弓ヲ射返スマジキ事也第一ノ覺悟ナリ又竹馬記ニ船中ニテ弓ヲ射ニハ最初ニハ弓ヲ射返サヌ事ナリカヱルト云事ヲ忌ムル故ナリ後ニハ不レ苦總ヲ弓ヲ射返サヌ數多アリ射

返ヌハ矢継早(キ)也抔ト見タリ是等彼モノ
イマヒナリ不用足又射御ニ弓射返マジ
キ物犬追物蟇目船中ノ弓其外何ニテモ
二ノ矢ヲ番モノニハ弓ヲ射返事有ベカ
ラズ総別大事ノ物ヲ射(ル)時ハ弓ヲ射返(ス)間
敷事也是ハ射外(イハズシ)タル時頓(ヤガ)テ二ノ矢ヲツ
ガフテ射ベキ爲ナリ船中ノ弓ハ返ルト
イフ事凶(凶)事ナリ美人草ニ弓返ヲハ大事
ノ物射(ル)ニハセヌ也其故ハ射ハズサバヤ

ガラ二ノ箭ヲツガハンタメナリ弓返ヲ
シテハ遅(ヲソ)ク番(ツカ)ハルヽナリ又高忠聞書ニ
遠矢ノ射様トテハナキナリ弓ヲハ必(ス)射
カヱスベキナリト見タリ彼是ニテ臆(フ)ニ
其物ニヨリテ或弓返(ハヱカエリ)ヲナシ或弓返(ハ)ヲ止(メ)
ナドセル事ハタトヒ昔ヨリアル事ニモ
セヨ予ガ如(キ)弓術不鍛錬ノ者ノ可(レ)爲事ニ
モアラズ元來予ガ射術ニテハ弓返(リ)ト云
モノハ求テ態(ワザ)ト作スモノニハアラズ審

固持満相調テ純一ニ射發(イハナ)ツ期ハ弓ノ勢(ヒ)
餘(リ)テ泫刎廻(子リ)テ弓返(リ)トナルナリ然ニ其鍛
錬ノ上自然ト已モ難(レ)計妙所ニ至(リ)タル事
ヲ或打切ニ射或(ハ)弓返ヲ作シ抔セル事予
ニオイテハ甚(ダ)不合点ナリ予ハ下手(ヘタ)ナル
者故的場ナドニテ此ニ事ヲ試見(タメシル)ニ射術
甚煩キ也人ハイサ不(レ)知予ハ古代ノ武士
ノ所爲タリ(レ)不用(レ)之(ヲ)試テ自知セル上覺
悟センニハ如(シカ)ジ又矢継ヲ遅(オソ)クシテ二ノ

箭ヲ射ン爲テ弓返ヲ不成(レ)ト云事甚拙キ
射術ト謂(ッ)ヘシ徒然(ツレく)草(クサ)ニ二ノ矢ヲ憑ム事
ヲ嘲リタリ兼好法師以前ハ如何ニモア
レ佛者ニシテ歌道抔好(メ)ル男ニテ猛武ノ
士ニ非ズソレスラ其道ノ實事ヲ論ズル
所然リ況ヤ武射ナル者最初ヨリ二(ッ)ノ矢
ヲ憑テ其射ニ儲所ヲ爲(ス)トハ耻ベキニア
ラズヤ勿論二(ッ)ノ矢ハオロカ其勝負ノ念
慮ハ金輪際矢数ノ有ナン限(リ)モ射ベキナ

レドモ唯一筋ヅヽノ箭コソ冥途黄泉ノ矢ナリ覺悟第一ノ場ト云ベシ初ヨリ二ッノ矢ヲ憑ヌルガ如キ拙キ射術ハタトヒ名家ノ書ニ出タリ氏古代武士ノ事跡タリ氏予ガ射術ニオヒテハ唾(ツバキ)バキシテ是ヲ不(レ)取其意氣相齟齬セル人ハ予ガ同好ノ士ニアラザレバ席ヲ同シテ是ヲ不(レ)論ハヤク修行ヲ断(タツ)ゲキモノナリ

五 依弓可巻藤品之事

一 塗弓ニ矢摺鏑藤ナキハ畧儀也又白木ノ弓

ニハ藤ヲツカハサル事本式也若シ弓ノ弱キ所ニ遣ツ氏口漆シヲサスベカラズ

○一貫曰射御拾遺抄射御持長記弓法私書諸書當用抄犬追物方聞書用害記抔六部ノ書ハ小笠原家流ノ書也塗弓ノ条ニ矢摺藤本末弭ノ藤ハ必然遣フ事ナル由見タリ勿論塗弓ハ雨濕炎天ニ犯(オカ)サレマジキ爲ニ制作セルモノナレバ此藤ヲ遣事肝要ナリ巻藤ノ名所等ノ趣ハ別ニ記ス

又白木ノ弓ニ藤ヲ不レ遣事弓馬故實ニ白
木ニ藤ツカフ事有マジキ事也若シ弱キ
所ナトニ遣フ事アラバ口漆ヲサスベカ
ラズ是モ晴ノ的ナド射ル事有マジキ也八
廻日記口傳云側白木ニ矢スリカブラ藤
ヲ遣フ事ユメく有マジキ也抔トモ見ヘ
タリ白木弓ハ云ニモ不レ及側白木ノ弓ニ
スラ矢摺カブラ藤遣フ間敷事ヲイヱリ
元來白木ハ漆以ステヌリ藤以テ巻事ヲ不

作清浄潔白ノ容形闘戰専用ノ器ニアラ
ザレバ禮讓ノ用務不過之故ニ常射的弓
トハセルサリサレバ藤ヲ巻事モ肝要ノ
所迮ニ遣事ナリ（肝要ノ所トハ上下ノ彌関板ノ堺ト矢摺ト三所也）
又口漆ト云物ノ事重藤弓ニ藤ノ上ヲ不
塗ニハ悉ク此口漆ヲ引事然リ是ハ巻藤
ノ止口堅固ニナリ巻端ヨリ雨濕入ザル
爲ニ塗事ナリ依之彼禮義ヲ専用トセル
白木弓ニハ不得止藤ヲ遣フ氏口漆ヲ引

事ヲ本義トセザル事シカゾアルベキ又
弦モ塗弓ニハ塗弦(ヌリ ツル)ヲカケ白木ニハ白弦
ヲカクル事本義ナリ又射御ニ拵弓(コシラエユミ)ニハ
塗弦ヲカケ白木側(ソハ)白木村剋(ムラ コキ)等ハ白弦ヲ
カケベシト云ゝ小笠原大双紙ニ塗弓ニ
白弦掛ベカラズ殊ニ馬上ニテ不可持(レ レ)イ
ワレ有事也白木ニ塗弦カケベカラズ子
細アル事也云ゝ弓馬故實ニ塗弓ニハ必
弦ヲモ同弦輪マデヌル物ナリ然(ル)間白木

ニハ必弦モ白弦成ヘシ云ゝ弓馬聞書ニ
塗弓ニ白弦カクル事有ベカラズ又的出
張記ニヌリ弓ニ白弦カケザル事并ニ白
木ニヌリ弦カケヌヲ心得ベシトアリ可
考兎角其器ニ應用爲ベキ事肝要ナリ但
シ不止得時節至來ハ別記ナリ常躰ノ禮
容而已ニ不可拘其覺悟ニ坐スルヲ活物
ト云可思惟者ナリ右ニ引用セル射御拾遺抄ハ小笠原備前守持長應永廿九年ノ記ナリ射御持長記同之弓法私書作者年暦不詳諸書當用抄北

畠記也年暦不詳犬追物方聞書伊勢下総入道宗吾記文亀年中也用害記河村入道誓真記永禄八年ナリ又八廻日記口傳ハ小倉左近将監實澄記也多賀高忠ノ第也小笠原大双紙記者不詳弓馬聞書元亀元年堤右京亮右宗記之的出張記永禄六年五月伊勢六郎左衛門尉貞久記之也

六 馬上納弓之事

一馬上ニ弓ヲ持ツ時自然両手ニ用アル時ハ弓ヲ鞍ノ上ニ尻ノ下ニ敷ベシ弓ノ方ヲ敷テ弦ヲ鞍ノ外ニナシ末弭ヲ左ニスベシ弓取ル時モ左ノ手ニテ取ベシ

○一貫曰此事本文ノ趣甚非ナリ不可用既

○高忠聞書ニ自然両手用ノ時ハ弓ヲ鞍ノ上ニ尻ノ下ニシク也弦ノ方ヲ尻ニ敷也弓ノ方ハ鞍ノ外ニナルベシ弓ノ末弭(ウラハズ)ノノ左ノ方ヘナルベシサテ取時モ左ノ手ニテ可(レ)取ナリ

○諸書當用抄(ニ)云馬ニ乗弓持テ両ノ手入(ル)時ハ弦ノ真中ヲ尻ノ下ニ敷ヘシサテコソ両手モアクナリ

○竹馬記(ニ)云馬上ニテ弓持テ自然左右ノ手

ヲツカヒ度(タキ)時ハ弓ヲ其儘後(ウシロ)ヘ廻シテ末(ウラ)弭(ハツ)ヲ左ヘナシテ弦ヲ鞍ノ上(ヘ)敷(キ)弓ヲバ尻ツ輪ヨリ外ヘ出スベシ扨又取時モ左ノ手ニテ可(レ)取但シ御供ナドノ時ハ左右ノ手用アラン時ハ弓ヲ小者ナドニ持セテヨカルベシ个様ノ事ハ所ニモ可(レ)寄也

○一貫云右三書ニ記セル所弦ヲ敷トコソ見ヘタリ本文ノ如ク弓ヲ敷居セル事ハ甚不可ナリト可(レ)知臆(オモ)フニ此等ハ假初(カリソメ)ノ

事ナルベシ竹馬記ニ見ヘシ通リ个様ノ事ハ所ニモヨルベシトハ得タリトスベシ扇鏡ニ弓ヲ持テ鼻カム時ハ弓ヲ弦ニ脇ニハサミテカムナリト見ヘタリ其臨時ノ用ニ順テハ此趣ニモ可爲ニヤ或ハ其用ニヨリテハ是ヲ必トスベカラズ異本保元物語ニ金子十郎家忠先年十九歳軍ニ逢事ハ是ゾ初ナルトテ弓ヲバ肩ニカケ太刀ヲ抜額ニアテ爲朝ノ陣中ニ

喚テ懸入トアリ又異本平治物語義平重盛ニ組ントスル条ニ惡源太弓ヲバ小脇ニ搔挾(ヒミ)鐙蹈張ツタチ上リ左右ノ手ヲ擧幸ニ義平源氏ノ嫡々ナリ御邊モ平家ノ嫡々ナリ敵ニハ誰カ嫌ハンヨレヤ組ント云儘ニ先ノ如ク大庭ノ椋木ノ下ヲ追マハシテ五六度迫コソ揉(モラ)ダリケレ又源平盛衰記高綱渡宇治条ニ如何源太殿御邊ト高綱ト外人ニナケレバ角申殿ノ馬

ノ腹帯ハ以外ニ窕テ見ル物哉此川ハ大事ノ渡也河中ニテ鞍蹈カヘシテ敵ニ笑ハレ給ナト云ケレバ左モ有ナント思テ馬ヲ留メ鐙蹈張立擧リ弓ノ弦ヲ口ニ咥ヘ腹帯ヲ解テ引詰々々シメケル間ニ高綱サツト打渡メト云々或、一谷合戦、画ヲ見ニ馬上ニテ左ノ手ヲ指擧右ノ手ニ太刀ヲ持鐙ヲ蹈出シ馬ヲ飛シテ敵ニカヽランズル躰ノ武者箙ニハ矢二筋アリテ

弓ト弦トノ間ニ左ノ手ヲ指貫弦ヲ左ノ肩上ニ引懸タル躰アリ彼是ニテ思惟スベシサレバ馬上ニテ弓持タラン時モ其臨時ノ用ル所ニテ一定ノ事アルベカラズ予ガ弓術ノ師大口子積ヨリ傳タルニハ馬上弓ノ納様アリテ両手自由自在ナル一傳アリ其外軍馬者流ノ傳抔モアリ面授ニアラザレバ会得難成事ナリ右扇鏡ハ小笠原宗信政清ノ記トゾ年暦不詳又一谷合戦画ハ土佐光信筆ナリトゾ後花園

帝ノ御宇永享元年ヨリ今ニ
至テ三百八十余年ニナル

七 馬上可持弓事

一 馬上ニテ弓持ツ時ハ馬ノ右耳ヲコサス程ニ持ツ也頭高ナル馬ノ時ハ左ノ耳ヨリ弓手ニ末弭ナル程ニモ持ツヘシ

○射御持長記ニ馬上ニテ弓ヲ持ハ馬ノ耳二ツノ間ニ持之ベシナニトシテモ物射タル人ノ持様イカニモ可然云〻

○高忠聞書ニ馬上ニテ弓持時ハ馬ノ二ノ耳ヲ越ス越ヌ程ニ可持也頭高ク持タル

馬ノ時ハ馬ノ左ノ耳ヨリ猶左ニ弓ノ末弭ナル事モ有ベシ

○一貫曰右記セル所大躰本文ニ見ヘタル趣ト異ナラズ又高忠聞書別記ニ馬ノ上ニテ弓ヲヨク持タルヲ人ニ語時ハ弓ヲ能持コロシタルト語ベキナリト云ゝ此詞面白シ弓ニ限ルニアラズ何ノ武具ニテモ其器物ニ馴染テ其身ニ應同スレバ其器其人ニ喰合生附タルカ如ク和順セ

ルナリ此所ヲ持コロシテ杯トハ云ナリ
持コロサルヽ者ハ其器我物ニナラズ全ク
他ヨリ假リニ附着シタル如ク身不相應
ニ見ユル者也又射手方聞書馬上ニテ弓
ヲ持ニハ弭(ゆづか)ヨリ五寸計上ヲ持テ素袍ノ
袖ヲ弓ト弦トノ間ヘ入テウチ出スベシ
法量物異本ニ馬上ニテ弓持様握ヨリ四
五寸計上ヲ弦ヲアフノクラ馬ノ左間ノ
耳ノ間ニナシテ持ヘシ用害記ニ馬上ノ

弓握ヨリ上六寸バカリ置テ末弭(ウラハズ)ハ馬ノ
耳ノ間ニ置テ馬ノ耳ト弓ノ末弭トヲハ
文字形ニ見ユル様ニ持テ乗ベシト見ヘ
シハ勿論實事ナリ則軍記等ニ重藤ノ弓
ノ真中取テ抔ト云ル文章是ナリ馬上ニ
弓ヲ持テ此事ヲ自知スベシ握ヲ持テハ
時移ノ間持堪(モチコラヱ)ラルヽ者ニアラズ必(ス)弓ノ
真中ヲ持ベシ握上五六寸計置テ持時ハ
甚(タ)可ナリ古代ノ武士ノ實事ナルヲ可(レ)考

容義而已ニ拘ルベカラズ又馬上持弓禮
ノ事ハ射手方聞書ニ人ト打逢テ禮ヲス
ル時ハ末弭ヲ右ノ方ヘ取直シテ禮ヲス
ヘシ人ノ方ヘ弭ヲ向候事有ベキラズ法
量物異本ニ馬上ノ弓ヲ記シテ人ニ行合
ヲ禮スル時ハ弓ヲ横タヱ持也弓ノ本ヲ
オサムルト云ハ是ナリ弓法秘傳聞書ニ
弓ヲ取直シテト云事馬上ニテモ歩ニテ
モ人ニ行逢時持タル弓ノ末ヲ我右ノ方

ヘ寄ル様ニスルヲ云也是禮義ナリト見
ヘタリ此弓取直シテ抔ト野史文章ニモ
所々ニ見ヘタルハ此事ノ順逆ニヨリテ
呼ル事ナリ又弓馬故實ニ馬ニ乗弓持時
ハ必弾ヲサスベシ又射手方聞書ニ弓ニ
矢ヲ取添テ持事何ノ矢ニテモ筈ノ方ヲ
弓ノ末弭ニナシテ持也馬上ノ義ナリト
見ヘタリ此二个条イカニモ古代ノ武士
ノ風俗思ヤラスヽ也此外雨天ニ傘ヲサ

シテ弓持様ナドアレ氏畧之傘ハ柄立ト云モノニ指事也此柄立ハ傘ニ限ラズ馬上可持器物ニ依テハ可爲事也別ニ記ス

右射手方聞書ハ年暦不詳小笠原山城守へ聞之ト見ユ法量物異本ハ文安三年七月小笠原備前守持長記ナリ弓法秘傳聞書ハ不詳小笠原大膳太夫名アリ

一 八騎馬傍可令持弓太刀事

弓ヲハ馬ノ左リニ持ツベキ事ナレ氏隨兵ノ時ハ太刀ハ左リ弓ハ右ニ持ツ事ナリ又馬上ヘ弓ヲ出ス時ハ右ノ脇ヨリ通リテ後ロヨリ廻リテ指出スベシ

○射御ニ下人弓ヲ持箙(ウツボ)ヲ付テ御供ノ時ハ
馬ノ趾ニモ可行弓ヲ如此右ノ脇ニ持事
ハイカヾナレ氏昔ヨリ如此持セ来ルナ
リ馬上ヘ弓籍進上申事有之(レ)バ馬ノ趾ヲ
傳有之(レ)者也

○美人草ニ馬ノ先ニ弓ヲ持スルハ我ヨリ
右ニ持事ハ不審ナリト云人アリ其後ハ
馬ノ上ヘ取時ハ左ヨリ取ニ取ニ右ニ持

事不審也雖然古今ヨリ如此右ニ持ナリ馬ノ上ヘ人ヨル時ハ馬ノ後ヲトヲリテ扨馬ノ上ヘ出ス也前ヨリモ子細ナケレ氏後ヨリ出シタルガヨキナリ

○竹馬記ニ弓ヲ中間ニ持セテ馬ノ先ニ走スルニ右ノ方ニ行事ヲ不審ノ人アリ馬上ヘ弓ヲ取時ハ左ヘ寄テ渡ス間左ニ行ヌハイカヾト云不審也然氏昔ヨリ个様ニ馬ノ先ニ右ノ方ニ行也馬上弓ヲ取時

ハ馬ノ後ヲ通テ弓手ヘヨリテ捲(ニギリ)ヨリ上ト下トヲ左右ノ手ニ持テ弦ヲ上ヘナシテ渡ス也又馬上ヘ前カラ渡ス様モアリ馬手ヘ寄テ馬ノ頭ヲコシテ渡ス也此時ハ左ノ手ヲ手綱ニソト添ル也自然依(レ)ル時ノ義个様ニモ有度事有ベケレバ記也是ハ畧義也

○一貫曰右三書ニ出タル趣本文ト大同小異ナリ文章ノ趣全躰弓ハ左ニ持ベキ

事利用ナレバ左モアリナン但シ本文ニテハ太刀ト並ベ持時ハ左イニ太刀ヲ持シメ右ニ弓ヲ持事ト見ヘシハ是又能聞ヘタリ弓ハ長器ナリトイヘ氏太刀ニ比(クラベ)シテハ身近(キ)所ハ太刀弓ニ勝リタレバ利用ニモ太刀ヲ弓ヨリ先ニセル筈ナリ此事ニ付テ太刀ト並ベ持セザル時モ弓ヲ右ニ持シムル事ニナリシナルベシ夫ユヘ御射ニモ右ノ脇ニ持事ハイカヾナレ

氏ト記シ美人草ニモ我ヨリ右ニ持事ハ
不審ナリ氏竹馬記ニモ右ノ方　行事不
審ノ人アリ氏記セシナルベシ聞ヘタル
事ナリ又弓ヲ持セ様ノ事ハ美人草ニ下
人空穂(ウツボ)付サセテ弓持ベキ様ノ事弓ヲ立
テヽ弦ヲ先ヘナシテ握ノ下邊(シタヘ)ヲ右ノ手
ニ持ベシ肩ニカツギテ持ベシ馬ヨリ先
右ノ方ニ持ベシ又馬ノ跡ニモ持スルナ
リト見ヘタリ此持様甚(タ)安ラカナルベシ

但シ弓持事元來ハ自身持事ニヤ射御ニ
馬ノ先ヘ歩ノ供衆弓ヲ持事ハ自身持事
本儀ナリ小者中間ニ持セル事當世ノ畧
義也不苦也然トイヘ氏隨兵軍陣ノ時其
外晴(ハレ)ノ所ニテハ自身弓持事根本ノ義ナ
リト見ヘタリ此文章能(ク)聞ヘタリ隨兵ハ
守護ナリ軍陣ハ闘争ノ場ナレバ自身ニ
弓矢ヲ帯スル事ハ實正本義ナリ今當弓(ユミ)
臺被革(ダヒカツギカハ)箱立(ハコタテ)ナンド云ル物ニ弓矢ヲ組合
(台)

テ持シムル事ハ徒ニ莊觀而已ニシテ實事ヲ取失タル事也可考是古今ノ時変也

○同シ奴僕シテ持シムルニモ忽ニ馬上ニ取テハ其急事ニモカグル事アラズ今ノ弓臺ニ懸タル物ノ類ト同論ニスベカラズ但シ時変ノ移行事ハ不及(レル)義ナレバ時宜ニ任(ス)ベシタヾ故實ハ古昔ノ武士ノ所爲ヲ哲(さとつ)テ今當ノ器物ヲ活(イカ)スベシタトヒ事々物々其風俗ニ時変アリ氏武士ノ根

性ニオヒテ時変ナキ所アリ可思惟又右ニ評ズル弓ト太刀ヲ馬下(ノモト)ニ持セヌル事モ上古ノ事ハ又論ノ外ナリ同義ト思ベカラズ

一九 見弓事

弓構ヘシタル時貴人仰セラルヽ事有ウ時ハ矢ヲハヅシ膝ヲツキテ聞ヘキ也

〇一貫曰此事禮義ナレバ左モアルベキ者ナラン則射御ニ弓箭手挟(タバサム)折節貴人御言葉ヲカケラレバ矢ノ根ヲ其侭左ノ手ニ

テ弓ニ取添弓ヨリ先ヘ右ノ手ヲ越テ御返事ヲ可申又弓ヲ持テ主人貴人抔ニ物ヲ云或又禮ヲモスル時ハ弦ヲ内ヘ向末(ケウラ)筈(ハズ)ヲ右ノ方ヘ横タヘ身ニ引付テ右ノ手ヲツキ畏リ禮ヲ申(シ)物ヲモ云ベシト云々此等ヲモ互見シテ専禮讓ヲ失フベカラズ但シ本文ノ趣愚意アリ既ニ弓構シテ其射物ニ指臨タル所ハ太刀ノ柄ニ手ヲ掛タルニ異ナラズタトヒ貴人ハオロカ

イカナル事タリ𠦪其箭ヲ指ハズシテ言語ニ可渡カハ勿論其射物ニモ可依事ナレ𠦪騎射類ハ云ニモ不及草鹿圓物奉射小的ノ類迠モ其場其時ニシテ指懸急俄ニ貴命アルベキ様ナシサラバ常躰稽古射ナドノ時ノ事ニヤ合点難成常躰ノ稽古ノ事ヲイカメシク弓式抔ト題シテ記ベキカハ式作法ト云事ノ射術ニ何程火急ノ令命アリ𠦪射場ニ出箭ヲサシハゲ

ル期ニ及曽テ不可有ノ義ナリ稽古射抔
ノ時ハ其時宜ニモ可因ニヤ不及記事ナ
ラズヤ射御ニ見ヘタル趣ハ式作法ト云
射儀ノ節ノ事ニハアラズ路中参逢ノ禮
ト見ヘタリ能々可考

十入来爲持馴弓可出人事

一　袋ニ入タル弓ヲ下部ニ持スベキ事弓ヲ立
テ前竹ヲ前ヘナシテ附ヨリ下ヲ持ヘシ又
外竹ヲ先ヘナシテ肩ニカツキテモ持スベ
シ是レハ畧式也

○射御ニ弓袋ニ入タル弓ヲバ張弓ノ如ニ弓ヲ立テ前竹ヲ先ヘナシ握ヨリ下ヲ右ノ手ニテ持テ行ベシ又外(ソト)ヲ先ヘナシテ前竹ヲ肩ヘアラカツギテモ持ナリ不(レ)苦ナリ畧也

○美人草ニ弓袋ニ入タウ弓ヲ下人ニ持スベキ様ノ事弓ヲ立前竹ヲ先ヘナシテ握ヨリ下ヲ持ヘシ張弓ノ如ク持スベシ又外竹(トタケ)ヲサキヘナシテ肩ニカツギテモタ

セテモ苦カラズ畧義ナリ

○一貫云右ノ如何(ク)ノ(レ)説モ異ニモアラズ或(ハ)今世旅行抔ニ持スル弓ハ二張立一對ノ弓ニシテ矢籠ニ箭ヲサシ弓臺或被皮ト云物ヲシテ持シメルナイ勿論此事古昔ニハ不(ル)有(レ)器也此物ノ事矢室(ノ)類ノ愚評ニ出シテ爰ニ不贄(ルセ)又古代ハ馬上ニ袋弓ヲ持タルアリ是ヲ弓袋指(ユブクロサシ)ト云ナリ馬上旗ヲ旗指(ハタサシ)ト云ニ同例ナリ則伴(トモ)大納言流罪

ノ画後三年合戦画抔ニモ見ヘタリ又歩兵弓袋入ヲ持タル画酒呑童子之巻トテ繪詞ナル物ニ其反リヲ向フニシテ右肩ニ這タルアリ何様弓袋入ヲ持シムル事ノ新カラザルヲ可知弓袋ノ事別ニ記ス

右伴大納言流罪ノ画不詳臣勢金岡筆トアレ氏如何ニヤ猶可尋金岡ハ宇多帝ノ朝ノ人ナリトゾ宇多帝ノ寛平元年ヨリ今ニ至テ凡千十一年計ニナル後三年合戦画ハ飛騨守惟久筆也惟久ハ實朝将軍ノ時ノ画工トゾ實朝将軍ハ土御門帝ノ朝ノ将軍ナリ土御門帝ノ御宇建仁三年ヨリ今ニ至テ凡六百七年計ニナル又酒

呑童子繪詞之巻ハ古画ナレ𪜈筆者年暦等不詳

十一　弛弓以紙捻可結弦事

一　弛シ弓ノ弦ヲカウヨリニテ結フ事先ツ弦ヲ一巻シテ偖テ弓ノ外竹ヘ一巻マトイテ前竹ノ弦ノ所ニテ留ルナリ結ヒ所ハ末筈ノ下握トノ半ハニテ少シ上ヘヨセテ結ヘキナリ

〇一貫云此類ノ事ハ此下我持馴シタル弓ヲ人ニ出ストアル条ト互見考合時宜アルヘシ本文此条ハ徒ニ弓ヲ弛シ体メ置

時ノ事ナレハ人ニ對シテ禮不禮ノ沙汰
ナシサレバ何様ニテモ濟ゲキ事ナラン
旦ヘ弓ニ反イノ高早アリテ弦ヲ弛シ体
メ置ニモ一巻ニテハ弦ユルクテ体モ置
難キアリ其弓ニ因テ治定アラズ或体弦
ト云物ノ長短ニテモ違ナリ此体弦ヲ不
掛ニハ紙捻(コヨリ)ニテ結事モ末弭ノ下(モ)握トノ
半(ナカハ)ノ所一个所ニテハ弦不止(レ)本弭(モトハズ)ノ所ヲ
是非一个所結ビ握上ヲ一个所ト二所可

結置ナリ所詮是等ノ事ハ定タル事ニモ
不可有弛弓ニテ人ヱ出ス時ハ此下条ト
並見テ時宜ニ任セ専禮用ヲ失スベカラ
ズ是スラノ事ニ習傳ナドアルマジ

十二 我爲持馴弓可出人事

一 我カ持ナラシタル弓ヲ人ニ出ス時ノ事弦
ヲモ握リ革ヲモ取リテ弭イノアトヲ杉原
紙ニテ包ミカウヨリニテ結ヒテ出ベキ也
杉原ノ巻様ノ事二ツニ折リ又横ニ折リ順
ニ巻テ其上ニヒタヲ一ツ内竹ノ方ニトリ

テカウヨリニテ帯結ヒニシテ遣ス也若シ
又座席ニテ則時ニ出ス時ハ其侭モ出シテ
苦シカラズ吾カ所ヨリ遣スニハ右ノ如ク
認メ遣スベキ也

○射御ニ兼テ用意仕テアゲ申弓ハ格別ノ
義ナリ拵様ニハ關弦(セキツル)ヲ塗テカケヲ握革
ヲモ巻ベカラス弛弓ニテ進上申ベキ握
ノ上ニテカウヨリニテ弓ト弦トノ間ヲ
カナタコナタヱ取違テ弓ノ方ニテ両方

締ニ結ベシ白木側白木村刮等ニハ白弦ヲ掛ベシ何モ握革ヲモ巻間敷也カウヨリニテ結事ハ何モ同前云々

○竹馬記ニ弓ヲ人ノ方ヘ遣ニハ捲巻タル弓ナラバ解テ遣ベシ弦ヲバ紙捻ニテ一纏シテ弓ニ結付也握ヨリ一尺計上ニ紐ムスビニスベシ

○諸書當用抄ニ弓ヲ人ニ遣スハ握ヲ解テ可遣ナリ弦ヲ掛ベシ矢摺ノ上五寸計置

テ紙ヨリニテ結ベシユワデツカハヌ事
也知ヌハ耻ナリト云〻
○一貫曰右三書ニ見ヘシ趣並考シテ時宜
ニ任スベシ又射御ニ古弓ニテ握革ヲ巻
テ在之氏取テ可出但シ當坐ニ至リ射弓
ナドヲ遣ス事ハ握革ヲモ巻ナガラ張ナ
ガラ出スベシ張テ出ス時ハ引テ見テ出ス
事尤可然握革ヲ巻張テ出ス事主人貴人
ナドヘハ不及申其外少モ斟酌ノ方ヘハ

有間敷事也畧義等握革ノ上ヲ紙ニテ巻
テカウヨリニテ結テ出事有之是ハ握革
ヲ解タルニ同シ事也畧義ナレ氏用事也
何モ時宜ニヨリ格別ノ義可有之条々口
傳有之トアリ又包記ニ弓ヲ人ニ遣ス時
握ノ包様アリ弓ヲ包事握ノ所ヲ包也紙
ヲ立ニ二ニ折テ折メヲ外竹ニアテ右ノ
手ニテ紙ヲ取廻シテ前竹ノ真中ニテ紙
ノ端ヲ細ク折返シテ水引ニテ中ヲ結フ

ヘシ弦カケタルモ弦カケザルモ同シ但
シ弦掛タルハ弦ヲバ包マズ鳥打ノアタ
リヲ紙ヨリニテ弦ヲ引マワシ弓ト弦ト
ノ間ニテヤリチガヱテ前竹ノ中ニテ結
也弦カケタリトハ張タル弓ニハアラズ
馳シタル弓ニ弦ヲ掛ソヱタル也結所ハ
握ノ真中也水引ハ片締ニモ両ワナニモ
結ブナレ氏弓ハ平ミアル物ナル間両締
ニ結ベシト見ヘタリ此包様予ガ祖父ヨ

リ取傳タル水嶋流傳ノ小笠原ニモ異ナラズ元來是等鎖細ノ事ナレバイカヤウニテモ可然(レ)兎角宜ニ任ベシ

十三　於君前可張弓事

一　主人ノ前ニテ弓ヲ張ル事吾カ後口ニセサル様ニ心得ベシ

○射御ニ御前ニテ御弓ヲ張様事何時モ次ノ間ヘ持出次ノ間ニテ張ベシ持テ出ル様ハ御弓例式ノ如ク給テサテ直シ握ノヱヲ右ノ手ニテ前竹ヲ下ヘナシテ末筈(ウラハズ)

ノ先ヘナシサゲテ罷出次ニテ張ベキ様ハ末筈（ウラハズ）ノ弦輪ヲ能々直シテ東方カ南ノ方ノ柱ニテモ或ハ疊ニテモ末筈ヲ押當左ノ手ニテ握ニテモ或ハ何（ッ）方ナリ氏持テ右ノ手ニテ弦ヲ取体弦ヲ口ニ喰テ右手ニテ筈ヨリ一尺計握ノ方ヲ持テ左ノ手ニテ押タワメ本筈四寸五寸上ノ左ノ股ト膝トノ間程ニ押當テ弦ヲ右ノ手ニテ掛ベシ又膊（コムラ）ニ押當テ張ト云沙汰アリ

（蹲）腨

同輩ノ時ハ不苦也此時ハ弦輪ヲ口ニ喰テ張也或、又弦輪ノ關際ヲクワエテ張ベシ不苦(レ)也主人貴人ノ弓ヲ膊(コムラ)ニ當(アテ)弦輪ヲクワエテ張事有ベカラズサラ弓ノ出入ヲ直シ張カワヲモヨク直シ扨弦ヲ下ヘ末筈ヲ先ヘナシテ例式ノ如クニ下ケテ罷出御前ニテ出入ヲ見テ能直シ弦打ヲ二三シテ例式ノ如ク進上可申口傳有之者也

○同書ニ次間ニ持テ罷出ル時其儘ソコニ
テ張ベシト御意ナドアラバ各別ノ義ナ
リ然バ則(チ)御前ニテ其儘張ベシ張様同前
也弓ノ出入ヲ直シ申時ハ膝ヲ突テ左ノ
手ニテ押直申者也タトヘ不直氏御前ニ
テ蹈直ス事努々有間敷事也若(シ)モ蹈直シ
申ベシトノ御意ナドアラバ各別ノ義也
然ハ則蹈直シ素襖ノ袖ニテ押ヌグヒテ
進上申ベシ總別御弓ナドヲ蹈直シケル

事陰(カゲ)タリト云氏素襖ノ袖ヲ以テ押拭ヒ
申カ尤可然主人ノ方ヘ後ニナラヌ様ニ
順ニマワルベシ惣別末筈ヲ北(キタ)ヘ向テ張(テ)
ヌ事ナリ何モ順ニ取マワシ申事専要也
口傳有(レ)之云々

〇三議一統ニ弓ヲ張事其日ノ貴人ニ我身
ラ向テ張ベキナリ云々

〇一貫曰右ニ見ヘタル趣彼是見合兎角時
宜ニ應(ス)ベシ又其場所ト其器ニヨリテ一

様ニハナルベカラズ此下八九条ノ注ヲ互見スベシ

在三儀一統ハ安薺先生云足利殿時代也書名當家弓法集ト云将軍台命ノ書ニハアラズ私ノ覺書ナリ後人序文ヲ偽作シテ三儀一統ト名付タルナリ彼ノ序文ニ見ヘタル伊勢武蔵守満忠ト云人伊勢家ノ系圖ニ曽テ無シ鹿苑院殿ノ時ハ伊勢守貞信也又今川左京太夫氏頼ト云人モ今川家ノ系圖ニ無之義満将軍ノ時ハ今川伊豫守貞世トヲ文武ノ達人入道シテ了俊ト号スト見ヘタリ可レ考鹿苑院義満将軍ノ時應永元年ヨリ今ニ至テ四百十六年計ノ春秋ナリ

十四　於人前可張弓事

一人前ニテ弓ヲ張ルニ北ニ向テ張ルヲ忌也南東ヲ本式トスル也

○高忠聞書ニ弓ヲ張時ハ末筈ノ弦輪ヲ能ク
テ見直ニ懸リタラバ其侭置ユガミタラ
バナヲシテ隅(スミ)ノ柱ニ弓ノ末筈ヲアテヽ
左ノ膝ニアテヽ右ノ手ニテ弦ヲ取テ喰
テ弓ヲ膝ニ押當テオシテ右ノ手ニテ弦
ヲ懸ベシ扨右ノ手ニテ握ノ下ヲ取テ左
ノ手ヲ其儘置テ次第ヽヽニ弓ヲ上ヘ取
上テ張貝ヲ見ベシワロクハ其儘弓ヲ下
ニオシ當テ直スベシ押直ス時ハ立ナガ

ラモ又膝マヅキテモ直(ス)也北ニ末筈ヲ向テハ張間敷也カゲヨリ張テ出スベシ但シ前ニテ張ト所望ハラバ前ニテ張ベシ賞翫ノ人ノ居タル方ヲ後ヘナシテ張事有間敷也但シタトヱ後ヘナルトモ北ヘ向(ケ)テハ張事不可有張テ後素襖ノ袖ニテ弓ノホコリ押拭テ出スベシ弦音少(シ)二(ッ)三(ッ)スベシ云云

〇高忠聞書別記ニ弓張様東ニ南ニ向テ張

ベシ弦打ヲ三度シテ人ニ参ラスル也又
御主ノ御弓張ニモ同事也弦ハソトクヒ
シメシテ参ラスル也若切(シラ)サジ用意也
○一貫曰右ノ外弓馬聞書射手掻副記弓馬
故實三議一統ナドニモ貴人ノ方後(ウシロ)ニ成
ス間敷氏西北へ向張ベカラズ氏アリサ
レバ弓ヲ張(ル)方角ヲ忌事小笠原家ノ古書
ニ見ヘテ久キ者也此等ノ類ハ彼家傳ニ
ハ所見少シナラズ此事ハ陰ヲ嫌テ陽ヲ

尊ナド云事ナルベシ元來安静坐敷論ノ事ナレバ幼愚頑昧ノ忌嫌事ハ其侭ニシテ必ス破妨スルニモ不及トカク貴高ノ人ノ無禮ニナラサル様ニ可レ爲是等ノ類ノ小事ハ目掛ルニ不及又大事トスベキ事或ハ時至ナル期ハ分別アルベキ者也

可ニ思惟一ヽヽ

十五　張弓所可尋問事

一　主人弓ニテモ平人弓ニテモ張ル事アラハ張リ所何方ト窺イ可張也

○一貫曰此条子細モ何モ有ニアラズ徒(タダ)其弓ノ張所ヲウカヽヒ尋(ル)而已ナリ誰人ノ所ニテモ如何ニモ其張ツベキ所ヲ尋問スル事禮義ナリ況ヤ貴人ノ前ナドニオヒテヲヤ時宜ニヨリテハ側ニ有合人ニモ窺ヒ問ベキニヤ又貴人ニ直ニモ窺事モ有ナン歟其時其場ニモ可(レ)應ニヤ可考タヾ禮義ヲ要用トスベシ是スラノ事互見ノ書ヲ引用セルニモ不(レ)及義ナリ又参

考太平記本間孫四郎相馬四郎左衛門熊野ノ八庄司共五百餘騎ヲ射ル条ニ猶モ弓ヲ強ク引ン爲ニ著タル鎧ヲ脱置テ脇立計ニ大童ニナリ白木ノ弓ノ注署ホコ短ニハ見ヘケレドモ尋常ノ弓ニ立雙(タチナラ)ベタリケレバ今二尺餘ホコ長ニテ反(リ)高ナルヲ大木ドモニ押矯(ツケ)ユラヽト押張ナドヽ見ヘタルガ如キハ常躰ニアラズ別論ナリ可(レ)考

弓式辨　巻之上終